温故知新⑨

先達の方々は、高い意識で社会に切り込んでこられました。国土づくりの一翼を担ってきたのが公共造園の世界で、先生方は思想と技術両面の形成に身を粉にしてエネルギーをつぎ込まれてきたように思います。この活動を持続することは並大抵のことでは成しえません。様々な波乱やハプニングを経て、とにもかくにも現在に至っているのが実情ではないでしょうか。

最近、デザイン好きな若者から聞き捨てならないことを耳にしました。「造園事務所には就職したくない」。つまり、私たちは次世代を担う連中に切り捨てられるかもしれないのです。

風景をデザインすることは文化の領域の行為です。これは映画や小説と同じで、誰もがもの言えるということでもあるのです。確かに、たくさんの議論がされ、認識が高まることは望ましいことで、環境の質についての価値観が育つ土壌とも言えます。一方で、風景が流行として扱われることでもあります。商品化されたランドスケープもいくつも見うけられ、排除するものではなく社会に受け入れられている点で学ぶところが多いとみるべきでしょう。広くランドスケープを語り、ランドスケープする時代にこぎつけたということでしょうか。

一時代前の行政とコンサルタントが築いてきた公共造園形成の技術やシステムは、制度疲労とも言える状況をもたらし「使われない公園」「いらない公園」等の声となって私たちの耳に入ってきます。この意味で、公園の利用や管理に市民参加を仕掛けるのは、放っておいても人が集る良く出来た配置計画とデザインの空間と違い、プロセスやプログラムで人を集める反（脱）空間性のアプローチとも言えるでしょう。でも、空間的魅力はランドスケープデザインの本質である事に変わりはありません。また、それは社会感覚に根ざしたもので特別なものではないのです。難しいのは翻訳や創造です。評価は時間をかけて市民が（理解者や代弁者を通して）暮らしのなかで進めるとみるのが良いのではないでしょうか。

この仕事を続けてきた私たちは自信と志を呼び覚まし、デザインをよくわかる社会論として考え実践する時期を迎えているのではないでしょうか？喜ばれ残り続ける風景や公園について、実務を中心に多くの場面で考え行動する。高く掲げず地に下ろし、囲わずオープンにすることで有能な若者たちが魅力を感じ活躍できる舞台づくりができるのではないでしょうか。

西辻　俊明　㈱現代ランドスケープ代表

技術士、京都造形芸術大学講師、大阪松陰女子大学講師

自然と人間の環境に関する学問・技術であるランドスケープ　アーキテクチュアーを専門に活動。自然はあらゆる人間環境に必ず関係し、持続的生存のみならず豊かな文化的環境を保障するには、あらゆる知恵と熱意を傾ける対象であると考えています。最近はこれに加え、地域や生活者との視点・活動を一にした対応が必須で、環境対応の通訳者としての役割が増大しています。